

図書館だより

埼玉県立図書館

23号



梅開早春

陽あしがのび、寒気がゆるむ。ものの芽がふくらんでくる。平野をつつむ山々の姿がうるみはじめ、えみをうかべているように見えてくる。「山笑う」という季語を、俳句歳時記よりひろうことができる。

山々を背にした農家の庭先で、梅がほころぶ。

梅開早春

これは、正法眼蔵、梅華の巻の一詩句であるが、「ウメ、ソウシユンヲヒラク」と、読む人が多い。春になったので梅がひらいた、というのではないのだ。梅即春、梅一輪が早春全体だ、というのである。一が多を、部分が全体をあらわす、東洋的象徴主義といっていだらう。

早春の光は、いま野にみちている。

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

むかしの「と」

中島 愈

元日の朝の陽がもうまぶしい。私
は着物に着がえると、そわそわした
気分が庭にでた。下駄の高さだけ視
界もひらけて、庭木の幹が目新しい。
カタカタ敷石を踏んで、そのまま門
の外にでる。すると、
「あら、あのおじちゃんもきものき
ている」
と、道のむこうで、両手をひろげな
がら女の子がいった。私は「あの子
もあたらしい気分なんだな」と思い
ながら、女の子のまねをしてしまっ
た。

明るい気分のまま内にはいると、
「むかしはな、三方日の朝はうどん
だった」
といながら、お膳にむかった。
私の育った家では、正月三方日の
朝きまつてうどんを食べた。しかも
正月は年男の役めというところで、男
手による料理だった。
そのうち私が大きくなると、
「年男は長男がなるもんだ」と
いうことで、うどんつくりをおお
せつかつてしまった。うどんつくり

も、こね・ふみ・のばし・切りなど
順をおつて教わりながら、中学生ぐ
らいになると、なんとか一人前にで
きるようになった。

年男の長男は、自分の作った食べ
物をもつて神々におまいりする。仕
事場やかまど、井戸端にまでお供え
し、庭にある天神様には、雪がふる
うが風がつかろうがおまいりした。
大きくなるにつれて、「正月にな
ぜうどんを食べるのか」、私は疑問
をもつようになつた。友だちの家を
調べても、きまつてうどんというの
は意外にすくなく、白米・モチ、時
にはうどんというように、それはさ
まざまであつた。父や祖母に聞いて
も、「むかしからそうしているから」
というだけで、よくわからなかつた。
この疑問が解けたのはつい最近で
ある。

イモと日本人（坪井洋文・未來社）
によると、正月三方日にうどんを食
べるのはそれなりのわけがあつたの
である。
端的にいうと、それはイモ（豆、
大根、そば、麦等）を食べる文化と、
モチ（米等）を食べる文化は対立す
るものであり、稲作民族以前の畑作
民族の存在と世界観と、予測せしめ
る現象であるという。

正月三方日のうどんに関する私の
疑問はこれで解決したが、一つの現
象から遠い過去の世界をほりおこし
ていく学問に、ふかく感動した。そ
れとともに、畑作民族の末裔として、
さらに他の風俗言語習慣など、その
源流をさがさなければならぬと思
つた。

さて、長男の正月も節分の行事を
すませると、その役めから解放され
る。ふつうの子どもとなって春をむ
かえるのである。
三月、初午に「スミツカリ」を食
べ、三月、利根川の堤に土筆や草も
ちにするよもぎを摘みにいく。四月
薬師堂の花まつりで甘茶をかけ、「
どんがなまつり」（鉦、大鼓をたた
き、剣、なぎ刀、弓矢をもち、大き
な数珠の輪をもって厄病払いをする
村まつり）の用意をする。
そのころになると、家中そろつて
川の堤に草を踏みに行く。
「はだしになつて青草をふむと生命
がのびる」
と、祖母まではだしになつて草を踏
む。やわらかな青い草が足そこをく
すぐる。草の芽をとおして、大地の
生命が身体の中にしみこんでくる感
じがしてくる。
「ほら、桜の花びらがかすみのよう

だ。今年もほどよい実りがありそう
だ」
母にいわれて高い堤防から里をな
がめると、村の風景もみずみずしく
見えてくる。万葉人ならさしずめ
河の上のつらつら椿つらつらに
見れども飽かず巨勢の春野は
というふうなうたを、うたうだろう。
芭蕉ならば
静かにみれば物皆自得す
というであろう。
「見る」ことは、自然観察や理の
探究ではなく、自然との交感であつ
た。「見る」行為は、自然と一語に
なることであつた。しかし、子ども
の私はなにも知らなかつた。
われを忘れて春の一日を自然の中で
すごしたのである。たんばほやれん
げそうにかこまれておやつを食べる
と、また草の中でころげまわつたの
である。「見る」こと云々がわかり
かけたのは、よわい三十も後半であ
つた。

（児童文学家協会々員）

以上子どものころのことを書いた
が、これは人間がまだ自然の一部で
あつたころのものがたりなのである。
（児童文学家協会々員）

埼玉の文学 埼玉の詩人たち

▽4△

渋谷 定輔

近代詩の中で純粹に心身を燃焼さ
せ、農民の詩を書き農民運動に関与
した詩人が二人いる。宮沢賢治と渋
谷定輔である。賢治はインテリゲン
チユアであり定輔は貧農であつた。
賢治の詩は磨かれた詩であり、定輔
の詩は荒けずりの生活記録である。
定輔の詩集「野良に叫ぶ」（大正
十五年七月刊）は、農村の内部と一
個の農民の心情とを表現した小作人
による最初の農民詩集として高く評
価されている。詩集のあとがきに、
「既成の詩の形式や技巧は全然無視
して書いた。否無視したといふより
も、むしろそうしたものには必要だ
つたのである。そのため、単なる「
叫び」に終わっているかも知れない。
然し私はそれを自覚して、野良に叫
ぶ」と題した」と書いている。
定輔は明治三十八年十月十二日、
埼玉県入間郡南畑村砂原（現・富士
見市）に生まれた。「荒川の中流を
裏にし、よく水害に悩まされる貧

農（自作兼小作）の長男として生れ
出た。私は本当に野良に生れ野良
に育つた野良の子だ。私は田や畠の
畔に寝かされて成長した。時々寝そ
びれて泥田に落ち、生命危篤に陥つ
たことが屢々あつたということだ」
（「私の略歴」昭和四年刊「新興文
学全集」）
四十五年、南畑尋常小学校入学。
毎日学校から帰ると野良仕事の手
伝いや子守をする。大正五年、小学
五年、吉原平五郎や従兄渋谷長治ら
と始めた回覧雑誌「黎光」に短歌を
寄稿。みずから回覧雑誌「光」を作
り、二号まで出すが教師から停止さ
れる。六年、従兄らから大杉葉の本
やマルクスの「資本論」、ゲーテ、
ハイネ、石川啄木の詩集を借りて読
む。九年、高等小学校卒業と同時に
堤防工事の土工として働く。一日三
十五銭。十二月、日本社会主義同盟
加入。短歌雑誌「尺土」に歌を発表。
十一年、土工、貧農生活の不平等を
短歌に表現、「尺土」の後身「我
等の詩」などに投稿。吉原平五郎主
宰の「青酔」に準同人として参加

（ペンネームを明星章）、また詩誌
「鎖」にも参加する。
十二年三月、親しんできた短歌に
あきたらず日記に鬱憤を書き始める。
これが、のちに出る詩集「野良に
叫ぶ」である。八月、「文化運
動」誌上で土田杏村を知り文通が始
まる。日記に書きつけた手記を送り、
「これは立派な詩」だと激賞され、
引続き書くことをすすめられる。十
三年、「無産詩人」に参加、二号に
「活地獄」、三号に「口笛切斷者は
誰ぞ」を発表。十四年八月、詩集を
整理、詩稿を土田杏村に送る。十二
月、農民自治会を創立。十五年四月、
農民自治会の機関誌「自治農民」創
刊。二号より「農民自治」と改題。
七月、詩集「野良に叫ぶ」刊行する。

野良に叫ぶ

渋谷定輔詩集

詩は「風のなかの野人」にはじまり、
「手紙」におわる七十三篇である。
大地に書こう
仲間よ／きみたちの机を飾る／
美しい詩集をやきすてる
ペンも 紙も インクビンも
なお その机をたたき割れ
それで／この日にやけた 泥

じめつた／おれたち純粹の土百
姓の 手で腕で／血と肉と／汗
と涙の結晶の／ほんとうに生き
た／おれたちの詩を／否 生活
を／大地に書こう／仲間よ
「激怒に貫かれたナマの表現が多
く、生活記録からさほど抜け出てい
ない」の評もあるが、日本の農民自
身による初めての文学的自己表現で
あり、記念碑的農民詩集である。
その後、昭和三年、日本非政党同
盟結成。全国農民組合加入。四年、
埼玉県連書記長。五年一月、池田黎
子と結婚。三月、全農左派機関誌「
農民闘争」発行。九年九月十六日、
妻黎子助産のため二十五歳で死去。
（五十三年に黎子の告白記録「この
風の音を聞かないか」刊行される。）
戦後、新日本文学会入会。三十年、
日本農民文学会結成に参加、理事と
なる。四十五年二月、青年期の生活
記録「農民哀史」刊行。五十七年、
「思想の科学」研究会会長。また、「
富士見市農民と市民の会」を組織し
年刊誌「農民と市民」発行。健在。
自宅は東京都渋谷区千駄ヶ谷。仕事
場は富士見市上南畑（農民哀史）の
場。いまも「野良に叫ぶ」の詩人は、
埼玉に、富士見に生きている。
（日本ペンクラブ会員 榎本了）

東西南北

県立図書館合同蔵書 目録(書名篇)刊行に ついて

今日の情報化社会を迎え、急激に変貌を続けている現代社会において図書館は、県民のための生涯学習の施設として、また、情報センターとしての使命が、一層重要となつています。

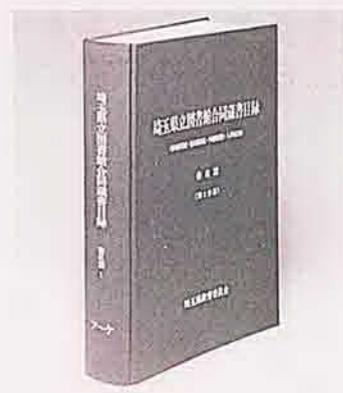
県立図書館が、真に県民の図書館として市町村立図書館等との相互協力によって、県民の多様で高度な学習活動に資するためには、必要とときに、いつでも、県立図書館の所蔵資料を利用できるシステムが確立されなければなりません。

その意味からも、県立図書館四館の合同蔵書目録の作成は急務であり市町村立図書館等からも強く要望されてきたものです。

このたびの合同蔵書目録の特色はこの記述にあたって、閲覧目録と同じように、利用者が求める資料の書誌的事項と、請求に必要な事項を網羅するため、必要に応じて副出・分

出を施したこと、書名・著者名・分類編とそれぞれ独立したものとして作成し、利用しやすくしたことです。

また、合同蔵書目録の作成方法として、冊子体目録を作成した後でも書誌データが蓄積できるコンピュータ処理による機械編集で目録を作成する、いわゆる電算写植システムを採用したことです。最終年度(昭和六十一年度)には、整備されたマスターテープが完成し、これによって将来の書誌情報サービス活動を育てるための種子が播かれたということができます。



この目録は、各県立図書館の創設期から昭和56年3月までに所蔵している図書を取録したものです。ただし、洋書、郷土資料、児童図書及び

移動図書館用図書は含まれておりません。

今回、刊行された合同蔵書目録は広く県民が利用できるように、県内全市町村の図書館、図書館のない市町村は、中央公民館若しくは教育委員会へ、また、県下の高等学校、教育センター等へ配布する予定です。

なお、今回の合同蔵書目録は、資料の書名から検索を行うことのできる書名篇を4分冊にして刊行し、来年度以降、著者名篇、分類篇と順次刊行する計画で準備を進めています。

この目録の刊行により、県立図書館が県民にとってより身近な親しまれる図書館となり、市町村立図書館をはじめ、関係機関との緊密な連携によって、県民の学習活動が大きく促進されるものと期待しています。大いに御活用いただきたいと思います。

ふるさとの文学案内書の 利用について

県立図書館では、文化活動推進事業として、「県内文学散歩の案内書」を作成しました。

昭和五十八年事業として、「田舎教師」を中心とする、「田山花袋文学の周辺」を発行しました。

昭和五十九年度事業は、秩父方面の文学碑を中心に、「秩父の文学をたずねて」と題して編集しました。県立四館には、館外貸出用として各五十部備えてありますので、文化活動に、この案内書を御利用くださるようお願いいたします。

3月26日 主な催し物

県立浦和図書館

●著者を囲む会
日時 3月24日(日)9時30分
会場 吹上町中央公民館ホール
講師 若林繁太氏
演題 「私たちの家庭のあり方について」

新春フィルム映画会

日時 4月13日(土)14時
内容 縄文時代・深川芭蕉庵・群集の行動を考える
日時 4月27日(土)14時
内容 白い悪魔(覚せい剤)・生まれ変わる川(新河岸川流域総合治水対策)

県内図書館めぐり

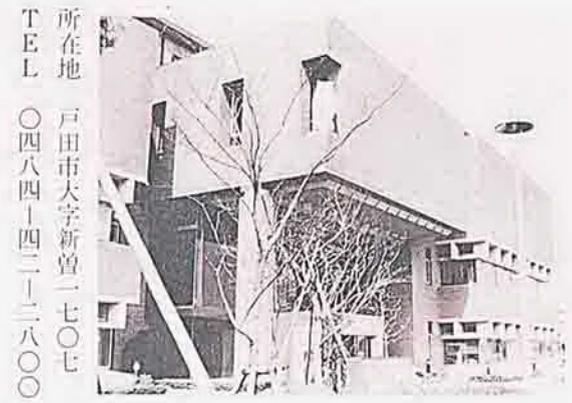
戸田市立図書館

市民の念願であった市立図書館が新築され、五十八年十一月一日に開館した。
新館の周辺には現在でも田畑が目立ち、当市の東部地区と比べると人口密度は少ないが、県立戸田高校をはじめ、小・中学校、スポーツセンター等のある文教地区の中に建設された。
当館の特色は、玄関上部外壁に置かれていたフクロウ科のミミズの石彫である。西洋ではフクロウは、知識や学問の象徴といわれている鳥で、当市においても、数年前までミミズクが生息していた。

そこで、図書館は知識や学問に関係が深いので、ミミズクをモデルとして、石彫を作り、建物の文化性を示した。「ミミズクのある図書館」、市民に身近な図書館として利用されるようにとの考えからである。また、当館では貸出票等にミミズクをデザイン化して、図書館のマスコットとして使っている。

概要

○施設 郷土博物館と併設、鉄骨鉄筋コンクリート地下一階・地上三階(図書館地下一階及び地上一・二階)、建築面積二、一五二㎡、延床面積六、六九九㎡(図書館三、〇八八㎡)
一階：開架閲覧室、対面朗読室、お話しコーナー、移動図書館作業室、事務室
二階：参考資料室・調査研究室、視聴覚室、録音室・会議室、地階：積層書架(十五万冊収容)
○所蔵資料 一般書二〇五、九六五冊、児童書五三、五四二冊、郷土資料四七五冊、新聞十五紙、雑誌二四八誌、視聴覚資料二、一八〇点



所在地 戸田市大字新曽一七〇七
TEL 〇四八四一四二二二八〇〇

県立熊谷図書館

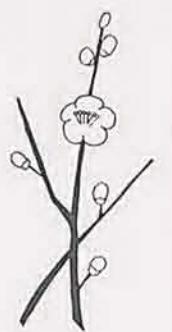
●こどもえいがかい
日時 4月6日(土)10時/14時
内容 ベっかんこ鬼・いたちのこもりうた・竹取物語
●名作映画鑑賞会
日時 5月4日(土)10時/14時
内容 未完の対局

●ビデオコンサート
日時 3月23日(土)14時
内容 マリリン フェリスト ステージ・五輪真弓 1983

日時 4月27日(土)14時
内容 伝説から神話へー山口百恵
日時 5月25日(土)14時
内容 エルビス オン ステージ
日時 6月22日(土)14時
内容 キャンデイズ ファイナルカーニバル ライブ

●定例映画会
日時 5月17日(土)15時
内容 深海の謎
●県立川越図書館
日時 3月22日(土)14時
内容 砂糖製法の昔と今ーわが国のエネルギーはどうなるーその現状と展望ー

●県立久喜図書館
●春休み子ども映画会



日時 3月28日(土)13時30分
内容 ベっかんこ鬼・ぼくの熊おじさん
●春休み親子映画会
日時 3月30日(土)10時/13時30分
内容 せんせい
●映画会
日時 4月11日(土)13時30分
内容 敦煌の芸術・また逢う日まで
日時 4月25日(土)13時30分
内容 鹿鈴・中華人民共和国の農業・中華人民共和国の工業
●名画鑑賞会
日時 4月27日(土)10時/13時30分
内容 未完の対局

◎会場の記入がない場合は、いずれも主催館(■印)が会場となります。詳細は県立各図書館へお問い合わせください。
県立浦和図書館(四六八)元二六三
県立熊谷図書館(四六五)三三六二
県立川越図書館(四九二)四一五六二
県立久喜図書館(四八〇)三一六五九

移動図書館用図書は含まれておりません。

読書グループの紹介

西所沢読書グループ

十五年のあゆみ

「よい本を読む会」への誘いを受けて昭和四十四年四月発足した西所沢読書グループは、初代表鹿島芳江氏を中心として、親睦の中に「充実した精神生活の向上」と「本に親しむ心の養い」をモットーに、はやく十六年の年月を迎えます。

二十名の会員の子供たちはそれぞれ独立し、お孫さんに囲まれている会員も多い。中には既にお亡くなりになった方、あるいは御長男のもとに引越した方、また御主人に先立たれた悲しみを乗り越え、趣味を立派に生かして生活なさっている方など積み重ねた年月の内には様々な思い出が折り込まれています。

独立の活動のほか、所沢市読書会連絡会主催の合同読書会への参加などあり、テキストの中で、「女坂」(円地文子)、「月山」(森敦)、「細

雪」(谷崎潤一郎)「出家とその弟子」(倉田百三)、等が特に印象に残っております。昨年十月には井上靖著の「花壇」を合同読書会でテキストとし、講師をお迎えしての講義と主人公の人生について話し合いをしました。

十一月には、晩秋の秩父路を訪ねて燃えるような紅葉の下で舟下りを楽しんだ後、日蓮宗の寺でしばし法話に耳を傾けました。また、下旬には図書館主催の文学散歩「武蔵野の自然と文学を訪ねて」に参加、徳富蘆花夫妻が半生を過した蘆花恒春園を訪ねました。

十一月十六日には、春日部市民文化会館での「本を読む市民のつどい」に参加し、埼玉県教育委員会教育長様より表彰状を頂く栄誉に浴し、会員一同喜びあいました。今日まで積み重ねた学びの道を更に奥深く、より充実した読書グループに発展させたいと思っております。



受影の喜び

ねぎぼうず読書会

川越市

この会は昭和四十九年十月、当時新設一年目を迎えた川越市立高階小学校五年生の父母があつまって発足しました。読書好きの子供に育てるためにはまず親から手本をと、二月に一冊本を読もう」を目標に、十余名の集まりが、はや満十年を迎えました。

当初は会員の家庭を会場に当てていましたが、現在では高階公民館の登録クラブとして広く一般の方にも呼びかけ、毎月第三主曜日の午後二時定例会を開いています。

年度当初一年間の読書活動と文学散歩の計画をし、あわせてテキストの選定を行い、年度末には反省会でしめくくっています。

過去十年間の読書活動は大きく三つの時期に分けられます。第一期、発足から四年間は会員の子供たちに合せて児童文学を中心に読み、並行して現代作家、女流作家の作品も読み進めました。

第二期、五年目からの三年間は明治・大正・昭和にかけての主要な作

家の作品を年代順に追って読みました。(夏目漱石・森鷗外・芥川竜之介・太宰治・三島由紀夫等)

第三期目は歴史を題材に取った作品群の中から古代「額田女王」から始まり「女人平家」、「北條政子」、そして戦国時代に生き抜いたお市の方や、その姫君の数奇な運命を綴った「流星」、「乱紋」等を読み進め、いまは江戸大奥の生活を書き上げた吉屋信子の「徳川の夫人たち」を読み終えたところです。

このように、最初に大きなテーマや傾向を設定してから二、三年かけてじっくりと取り組んでいます。また、昨年は読書会発足十周年を記念して、「戦国武将とその妻妾たち」と題し高校の先生に講演をいただき、かつての会員の方たちも混じえた和やかなひとときも持つことができました。

子供たちもやがては果立ってゆきます。これからは読書を通して、ひとりの人間として生き方をみつめてゆくために十五年、二十年へと地味であっても確実な一歩一歩を積み重ねてゆきたいと思っております。

(山田富美子)



荒川

—大里郡域を中心に—

奥秩父の甲武信ヶ岳に源を発し、埼玉を貫いて東京湾に注ぐ荒川は、その流域に住む人々の生活と深くかわって来ました。しかし社会環境の変化の中で、人と川との結びつきも変わってきています。

県立熊谷図書館では、その移り変わりを資料でたどる「荒川資料展」大里郡域を中心に「荒川資料展」を開催いたしました。今回は、この展示資料の中から、抜粋して紹介いたします。(展示資料の詳細は、「荒川資料展」目録)埼玉県立熊谷図書館刊、荒川に関する文献は、「荒川関係文献目録(1)」埼玉県県民部編さん室刊を参照してください。

【図書資料】(記載は、書名、著者、出版社、出版年、「所蔵館」の順。ただし、県立熊谷図書館所蔵のものは表示せず)

1 自然・民俗
荒川 その土と心 朝日新聞浦和支

- 局編 朝日ソノラマ 昭52
- 川 隅田川 岩波書店 昭25(岩波写真文庫19)
- 埼玉県植物誌 埼玉県教育委員会 昭37
- 寄居町の自然 寄居町史資料集 植物編 寄居町教育委員会 昭56
- 埼玉の変貌 地理演習刊行記念 埼玉地理研究会 昭49
- 荒川流下土砂量調査報告書 埼玉県土木部 昭36(浦)
- 熊谷の姿 ふるさとの心をここに 熊谷市文化連合 昭48
- 熊谷市の民謡 埼玉県民謡緊急調査報告書 埼玉県教育委員会 昭56
- 埼玉のまつり 埼玉県県民部県民文化課編 国土地理協会 昭56
- 武蔵国式内社の歴史地理 菱沼勇著 菱沼勇著書刊行会 昭41
- 2 歴史
埼玉県水害誌 埼玉県 大正元
- 昭和十三年大洪水 内務省東京土木出張所 昭14
- 昭和二十二年九月埼玉県水害誌附録写真帖 埼玉県 昭25
- 埼玉県の気象災害 埼玉県消防防災課・熊谷地方気象台 昭45
- 関東地方水害写真集 建設省関東地方建設局 昭57
- 熊谷市史 前、後篇 熊谷市史編纂

- 委員会編 熊谷市 昭38
- やさしい熊谷の歴史 中島迪武著 熊谷市児童文化協会 昭48
- 熊谷市荒川区郷土史年表 加藤朝男著 杉の芽社 昭45
- 花園村の今昔 花園村写真集編集委員会編 花園村 昭54
- 本島村誌 本島公民館 昭28
- 川本町文化財資料特集 昭和53年第2巻 川本町郷土を知る会 昭54
- 3 治水
荒川上流改修六十年史 建設省関東地方建設局荒川上流工事事務所 昭54
- 荒川 建設省関東地方建設局直轄事業100年記念 建設省関東地方建設局 昭51



- 松浦茂樹(著)・刊 昭53
- いしづみ 碑に刻まれた埼玉の土地改良 埼玉県土地改良事業団体連合会 昭58
- 久下・太井 熊谷市教育委員会・熊谷市立図書館編 久下公民館 昭52
- 玉井壇維持方法誓約書其他綴 熊谷市上中条中村家文書 明11/24
- 玉井壇関係二重負担減高願一件書類綴 熊谷市上中条中村家文書 明6
- 濁水堰切論一条 熊谷古文書研究会 昭54
- 大里用水路改良事業計画書 埼玉県昭3
- 石原村誌 秋山藤三郎編 明42序
- 下忍村史 藤塚一三郎・稲村担元著 下忍村役場 昭26
- 4 産業
荒川大橋の変遷 明治以降県北交通の発展 神山喜義著・刊 昭59
- 中山道分間延絵図 第3巻 熊谷深谷 東京美術 昭52
- 寄居町の民俗 町史編さん調査報告第8集 寄居町教育委員会町史編さん室編 寄居町教育委員会 昭57
- 郷土のあゆみ 第9集 寄居町文化財保護審議委員会編 寄居町教育委員会 昭42
- 寄居町史 近世資料編 寄居町教育委員会町史編さん室編 寄居町教育

二瀬ダムと荒川総合開発資料 埼玉県立熊谷図書館合綴 昭51(荒川総合開発調査計画概要書 埼玉県編ほか)

荒川流域平野部における開発と治水

編集後記

県立四館の協力事業の一つ、図書館だより」の発行も、順調にすすみ、23号をお届けいたします。この「だより」が、読者と図書館をつなぐ、太いパイプとなるよう、頑張りたいと存じます。三月になって二度目の春雪が舞い、淡雪ですみずぐ消えますが、世界状況の雪解けは、なかなか時間のかかる感がいたします。五十九年度が終るにあたり、御執筆並びに写真を御提供くださった方には、厚く御礼を申し上げます。

大13 (浦) 埼玉県名勝史蹟写真帖 埼玉県名勝史蹟写真帖刊行会 昭3 (浦) 映像資料(16ミリフィルム) (記載は題名、製作会社、製作年、(所蔵館)の順) 荒川 中日映画社 昭48 (浦・熊川) 結ぶ緑の交流 日経映画社 昭58 (浦) 埼玉ニュース 埼玉県報道文化課 昭37 (浦・熊) 第一〇四号 「三瀬ダム」を収む 第一一〇号 「荒川に更に県営発電所」を収む

埼玉の文学 秋谷豊編 埼玉新聞社 昭54 埼玉の文学めぐり 関田史郎著 富士出版 昭48 武州鉢形城 井伏鱒二著 新潮社 昭38 (浦) 鍵のかかる棺 上、下 森村誠一著 新潮社 昭50 銀の川 水上勉著 角川書店 昭36 木曾街道六十九次 池田英泉、安藤広重共画 浮世絵頒布会 昭12 (浦) 熊谷郷土読本 熊谷市教育会 昭11 埼玉県名勝史蹟案内 熊谷一三案内 埼玉県名勝史蹟案内刊行会

委員会 昭58 埼玉県水産要覧 埼玉県農林部農産課編 埼玉県農林部 昭28 (浦) 埼玉県の漁具・漁法 埼玉県農林部 蚕糸特産課 昭53 荒川の漁具・祖おやの譜録 特別展 埼玉県立博物館 昭59 埼玉県写真帖 埼玉県編 埼玉県 大正元

花園村史 花園村 昭53 熊谷染色の歴史 熊谷の染色を語る会 昭58

5 文化 佐吉多万 文学資料古典篇 埼玉県高等学校国語科教育研究会 昭44

おたすねください

問 春を告げるサクラ前線について知りたいのですが。 答 生物前線とは一年の経過の中で、季節の変化に応じて、はじめて花の咲きはじめる時期や場所、鳥がはじめて見えたときとか、はじめて鳴き出したときなどをつづった線をいいます。ソメイヨシノが開花する日を各都市ごとに印し、同じ日を経る線がサクラ前線、またの名、お花見前線です。全国九十四カ所の気象庁観測データをもとに作成します。 サクラの開花は何といっても南

が早く、三月の後半にはもう九州や四国の南端で咲きはじめますが、そのころ雪にとざされてる北海道では五月になってようやく花が開きはじめます。大体平均気温一〇度の暖かさとともに北上していきます。 東京では靖国神社境内の樹齢五十年ほどのソメイヨシノが、開花予想の指標となっています。平均開花日は三月二十九日ですが、いちばん早く咲いた記録は三月二十

日(一九六五年)、いちばん遅い開花は四月七日(一九二五年、一九三四年)と半月間のずれがあります。いわばこれが春の本格的到来のはばといえます。 外国でもサクラが季節の進みおくれの日安にされているようすが、たとえばソ連では開花の早い年と遅い年とでは土地によって二カ月の差があるといえます。 春は花の季節です。色とりどりの花の前線「花ざかりの最先端」が、チヨウを舞わせ、鳥を歌わせながら春の日本を北上していきます。

参考文献 「現代用語の基礎知識」 自由国民社 「お天気365日」 サンケイ新聞社 編集部編 住宅新報社 「日本のお天気」 大野義輝著 大蔵省印刷局 「日本列島の四季」 岡林一夫著 草友出版